



巻 頭 言

「平成の大凶作」に想う

(財)日本植物調節剤研究協会 理事 宮本 聰
八洲化学工業(株) 常務取締役

本年産米の10月15日現在における作況指数は75で、「著しい不良」となった。“戦後最悪”、いな、“天明の飢饉以来の大凶作”などに見だしされ、コメ不足、米価の急騰、外米の緊急輸入、ひいてはコメの市場開放論議と連日、新聞やテレビを賑わし、日本国中が騒然としている。ついこの間まで、“飽食の時代”、“グルメ時代”とかいわれ、コメは余剰の産物として、貿易不均衡は正のための市場開放や、食糧制度の改廃など、批判的な報道に終始していて、コメの主食としての価値が論ぜられることは少なかった。本年の凶作が、私ども一般国民に強い不安感をあたえ、食糧としてのコメの重要性がこれほど認識されたのは、戦後の食糧難時代以来のことではなかろうか。

農業史に詳しい、北興化学の小西さんの紹介で、荒川秀俊著、「飢饉」(教育社刊)なる単行本を通読したところによると、史上空前といわれる“天明の大飢饉”は、天明2年から天明7年まで続いたが、なかでも天明3年(1783年)には、真夏まで霖雨が降りつづき、夏でも^{あわせ}給や、綿入れを着ていなければならないほどの寒さであった。

さらに、5月末から7月にかけて、浅間山の大噴火による降灰が拍車をかけ、東日本における大凶作となった。連年の冷害に加え、天明6年には関東をはじめ、広い範囲にわたる大洪水もあり、食糧不足による餓死者は日本全国におよび、その数は東北地方だけでも約20万人に達する悲惨を極めたものであったという。

本年の「著しい不作」の原因は、東日本における7月以降の冷温少照と、いもち病の併発、西日本における台風13号を含む、5月下旬から

8月中旬までの長雨や豪雨によるものであったが、それに雲仙普賢岳の噴火を絡み合わせると、天明年間の大災害を彷彿とさせるというのは、大げさであろうか。本年の凶作が、明治維新までの出来事であれば、歴史に残る災害となったのは間違いあるまい。幸いにして、現在の民主主義社会と進歩した農業技術のなかで、飢饉というような非常事態は考えにくいとしても、地球的な規模において人口が膨張し、食糧不足が確実視される将来のために、わが国の食糧の確保と農業について真剣に再考してみるチャンスであると思う。

コメの不足を補うために、タイやアメリカなどから、約200万トン^のの外米が輸入されるという。世界の市場に出まわっているコメの量は、約1,200万トンといわれているので、実に6分の1にあたり、世界のコメ相場の暴騰をまねくばかりでなく、従来コメを輸入して国民の食糧を賄ってきた低開発諸国の経済に重大な影響を与えかねない。

財界や政界の一部には、長びく景気の低迷からの脱出と貿易不均衡の批判のツケをコメの市場開放に回すくらいさえあるが、本年の凶作により、現実となったわが国の食糧基盤の弱さをふまえ、少なくともコメは国内産で自給の方針を貫いてもらいたいものである。

「飢饉は2年つづく」という諺がある。これは凶作による飢饉により、農民が疲弊し、農耕に精を出せないということからきているという。凶作をつづけないために、国家的視野で、被災農家に対する支援と、展望ある農政の構築を願うとともに、来年の気象の復元を心から祈念したい。